

底ん処をよろしく

登場人物

川島佳純（かわしまかすみ）……………大衆食堂「底ん処」の看板娘
川島隆三（かわしまりゆうぞう）……………大衆食堂「底ん処」の店主で佳純の父
坂崎栄介（さかざきえいすけ）……………元弁護士、フリーライター、
村木信宏（むらきのぶひろ）……………サラリーマン・うだつの上がらない営業マン
奥村三平（おくむらさんぺい）……………理髪店の亭主
奥村以知子（おくむらいちこ）……………三平の女房
田代麻衣（たしろまい）……………キャバ嬢
細川亜矢子（ほそかわあやこ）……………寡黙な女性
日比野一樹（ひびのかずき）……………工場勤務の青年
小原翔太（おはらしょうた）……………工場勤務の青年
須藤弘庸（すどうひろのぶ）……………麻衣の元夫

舞台上手奥に厨房の入り口。その前に教脚の椅子とテーブル。三平が定食を食べているテーブルでビールを飲んでいる翔太と一樹。別のテーブルで一人定食が出てくるのを待っている亜矢子。下手より、坂崎が入ってくる。坂崎を空いているテーブルに案内した後、厨房につながる小窓の前に置かれた小鉢を取って坂崎のテーブルに向かう。

三平 申し訳ないけど、俺若い頃彼女がいない時期なんて無かったからさ。

一樹 出ましたよ、三平さんの昔もてました自慢。

三平 いや、逆にお前らに聞きたい訳よ。何でそんなにもてないの？どうやった
らそこまで寂しい青春に耐えられるの？

翔太 何すかそれ、腹立つわ。

一樹 三平さん本当に昔もてたんですか？

翔太 そうっすよ、怪しいすよ。

一樹 若い頃つつても基本その顔でしょ。

三平 男は顔じゃないの。どこまで本気で女と向き合うか。それが全てなの。

一樹　じゃあ三平さん、俺マジで相談していいですか？

三平　おう、何だよ。

翔太　一樹、またあの話か？

男達の会話F O

佳純　(亜矢子に)イワシの甘酢漬け、お待たせしました。

亜矢子　ありがとう佳純ちゃん。(イワシに手を合わせる)この艶、この香り。うん、幸せ。

佳純　(亜矢子が手を合わせる様子に)亜矢子さんに食べられるイワシも、きつと幸せですよ。

亜矢子　そうかしら。(笑)

厨房につながる小窓のところに出入りしている小鉢を盆にのせ、舞台前に進む佳純。

佳純　いらつしやいませ。(客席最前列のお客に)お客さんこの店初めてですよ。ね。良かったらこれ、味みてください。切干大根の煮物です。上品な料理じゃ

ありません。大根は他の料理用に桂むきにした皮を使っていますしね。でも本当に美味しいですよ。初めてのお客さんにはみんな食べて貰ってるんです。何て言うか、名刺代わり？(笑)栄養があつて美味しいものをうんとお安く出しますから、「底ん処をよろしく」って。

佳純は客達の中に戻り、汚れた食器持って厨房に。

一樹　でね、でね、聞いてます三平さん？

三平　聞いているよ。で、その合コンで会った女がどうしたって？

一樹　その子、仕事は保母さんなんすよ。あ、ほら、幼稚園で子供の世話をする、あれ。

三平　その説明いらなから。

一樹　でも職業のイメージってあるじゃないすか。

三平　その保母さんがどうしたんだよ。

一樹　見た目は幼稚園の先生って感じじゃないんすよ。着てる物も結構今どきで。

翔太　ギヤルですよ、ギヤル。

一樹　うっせいな。

三平　翔太も一緒だったのか？

翔太　はい。ひどい女ですよ。

一樹　（翔太に）邪魔すんなって。（三平に）でね、その子俺に何だったと思います？

三平　何だったの？

一樹　最初の一言が、もし結婚したら、私の為にその山売ってくれますか？って。

三平　何、どういう事？

一樹　そのまんまっすよ。（すねたように料理をつまむ）

三平　え？

翔太　こいつその合コンで、実家は結構な広さの山林を持ってるって言っちゃったんですよ。

三平 何でそんな事言ったんだよ？

一樹 だって女の子達が、男はみんな医者や弁護士だって聞いたから参加したの
にって言うんすよ。

三平 は？

翔太 セツティングした奴に後で聞いたら、それでも言わないと女の子が集ま
なかつたらしいです。

三平 (笑)お前ら医者や弁護士って顔か。

一樹 分かってますよ。だから俺正直に言ったんすよ。俺達みんな仕事は板金工
です。毎日車の凹み修理してます。マジ毎日凹みっぱなしって。

翔太 今のこいつの持ちネタです。当然誰も笑いませんよ。冷たくい零下五十度
みたいな空気が流れて「板金工さん、あっそう」みたいな。女は分かり易
いです。

三平 それで実家の山の話か。

一樹

ええ。そしたらその子、山つてどれくらいあるの？土地にしたら東京ドーム何個分？売ったら遊んで暮らせる位あるのって、初対面でそんな事、普通言います？

三平

さすがに初対面でその台詞はないな。

一樹

言わないっすよね。

三平

まあ金が全てってタイプだな。当然スルーだそんな女。

一樹

出来ないっすよスルーなんて。

三平

どうして？

一樹

その子めっちゃ可愛いんです。

三平

は？

翔太

ね、馬鹿でしょこいつ。

三平

まさかその子に惚れたってか？

一樹 はい。この日比野一樹、生まれて二十数年間守り続けて来た男の純情を、捧げる人をやっと見つけたつす。

翔太 よつ、チェリーボーイ。

一樹 あの子にフォーリンラブつす。

翔太 呆れるでしょ。

三平 一樹お前、そんな女のどこがいいんだよ？

一樹 ギャップつすよ。俺には見えたんす。砂場で泥んこになってる子供たちを優しく見守るあの子の姿が。膝つ小僧を擦りむいて泣いてる子供に、大丈夫だよって言いながら傷薬を付けてやつてる姿も。だけど合コンで会った男なんかには簡単に気を許さない。これでもかって位言いにくい事ズバズバ言うんすよ。本音で生きてるつつうか、常に上から目線の話し方も、何かいいんすよね。分かるっしょ？

三平 いやいや、分からないよ。

一樹 あのクールな見下し感が、俺の理想にピタシなんすよ。

三平 　　どんな理想だよ。

翔太 　　色々言ってるけど、見た目に惚れてるだけなんですよ。若くてちよつと可愛いけど、ほんとビッチですよ。

一樹 　　翔太、黙ってるって。

三平 　　その子はちよつとな。

一樹 　　だめっすか。俺、真剣に結婚も考えてるんすけど。

三平 　　結婚？

翔太 　　その合コン以来一度も会えてないし、貰ったメアドも嘘だったんですよ。

一樹 　　俺、もうここらの幼稚園十か所位回りました。絶対探し出すつもりっす。

翔太 　　山があるって話以外、見事に何も食いついて来なかつた女ですよ。

三平 　　やっぱりその子はやめとけ、付き合ったら苦労するぞ。

一樹 　　若い時の苦労は買ってでもしろって言いますよね。

三平
それ使い方間違ってるしな。

翔太
阿呆や阿呆や阿呆の見本や〜。(笑)

一樹
(翔太の首を絞め)さつきからうっせーんだよ。

翔太
堪忍、堪忍じすえ〜、

一樹
関西人か〜、

三平
(笑)もうやめろ、お前ら。

一樹
三平さん俺マジなんすよ。

三平
分かった分かった。

大笑いする三平と翔太、しゅんとする一樹。一人静かに食べている坂崎を見る佳純。

佳純
(三平達に)ちよつと、あんた達うるさ過ぎ。初めてのお客さんもおいでなんだからね。

三平 あく悪りい、悪りい、(坂崎に)すみませんね。

坂崎 あいえ。

三平 (一樹と翔太におい、お前ら、

一樹 (坂崎に)すみません。

翔太 すみません、どうも。

会釈で応える坂崎。

佳純 (坂崎に)ごめんなさい、うるさくて。

坂崎 大丈夫です。

佳純 ウチ常連さんがほとんどだから、みんなここを自分ちみたいにしてて。

坂崎 あの…。

佳純 はい、何か？

下手より突然入ってくる村木。うろたえた様子で隠れる場所を探すようにキョロキョロ。

村木 あゝ（空いているテーブルの下に隠れる）

三平 ムラ、

一樹 ムラさん何やってんすか？

佳純 村木さん、どうしたんですか？

村木 佳純、誰か来たら俺いないって言って。

佳純 え？

村木 頭のおかしな女に追っかけられてるんだよ。

一樹 女？

三平 お、何だよ色っぽい話か？

村木 冗談じゃないんだよ。

下手より、麻衣登場。

麻衣 ちよっと、

村木 うわっ、

三平 ムラ、

翔太 ムラさん、

麻衣 何犬ころみみたいにそんな所に隠れてんのよ。

一樹 あ…。(合コンで会った女と気づく。翔太もすぐに気づく)

佳純 (間に入り)あの、

麻衣 (佳純に)どいて、

佳純 どうしたんですか？

麻衣 うっさいわね、関係ないでしょ。(村木に)あんた出てこなかったら蹴飛ばす

よ。

翔太

一樹、

一樹

うん。

村木

(怯えて)お前、何だよ、頭おかしいんじゃないのか。

麻衣

おかしいのはそっちでしょ。

村木

冗談じゃないよ。いきなり人の事殴りやがって。

麻衣

あんたが約束破るからでしょ。

村木

意味分かんねえよ。

三平

ムラ、とりあえず出て来いよ。

村木

(恐る恐るテーブルの下から這い出しながら)そいつ押さえといてよ。まったく、人の頭ボカスカ殴りやがって。

麻衣

アンタのせいでいくら損したと思ってんの。

村木 知らないよそんな事。

三平 (麻衣に)あの、ムラ何かやったの？

麻衣 あんたこいつの友達？

三平 友達っていうか、顔なじみ。俺もムラもいつもここで飯食ってる常連だから。

麻衣 だったらあんたがお金払ってくれる？

三平 はあ？

佳純 村木さん、何があったの？

麻衣 こいつ村木って言うの？(村木に)何が木村よ、嘘つき。

佳純 村木さん、

村木 この子、西口のビビットって店のキャバ嬢。俺が同伴の約束破ったって怒ってんだよ。

翔太

キヤバ嬢…。

一樹を見る翔太。ショックを受けている一樹。

三平

何だ、そんな事か。

麻衣

そんな事？ふさぎけんじやないよ。同伴すつぽかされて、こっちは十二万も損したんだ。

三平

十二万？

佳純

(麻衣に) あの、同伴って？

チラリと佳純を見るが不機嫌そうに顔を背ける麻衣。

三平

こういう子が店の外で客と飯食ったりして、そのまま一緒に店に出勤するって事だよ。店は客の困い込みが出来て、客は女の子と店の外でデート気分が味わえるって訳。女の子には手当もついたりするしね。

佳純

そんなのあるんだ。

三平

でも、十二万つてのはちよつと、

麻衣

月に十五人の客を同伴したら十万の賞金。昨日は月末で丁度こいつが十五人目の客だった。それをすっぽかされて全部パー。おまけにこいつを待つて一時間遅刻したから店のルールで二万の罰金、合計十二万の損害、ふざけんじゃないよ。

村木

行けたら行くつて言っただけだろ、何言つてんだよ。

麻衣

あたし確認したよね、絶対来てねつて。メールも送ったしあんたも返事をくれた。あんたが来ないんだつたら他にもあてはあつたんだ。ほら弁償しなさいよ。

村木

弁償つて…たかがキャバ嬢との口約束、

麻衣

ちよつと、たかがつて何？たかがキャバ嬢？

村木

…いや、だから…たかが、口約束じゃないか。

麻衣

あんたねえ、

坂崎

口約束でも、場合によっては賠償を命じられるケースもありますよ。

村木

え、

坂崎

要は、約束があった事を証明出来るかどうかです。メールのやり取りが残っていたらそれは証拠になります。

麻衣

そうなの、ありがとう。(村木に)メールなら残ってるから。そっか、金払わなかったら裁判所に訴えたらいいんだ。

村木

馬鹿じゃん。十方位の金で裁判って、弁護士頼んで裁判したら費用とか期間の方がよっぽど大変だよ。

坂崎

今は三十万以下の請求なら少額訴訟って制度があるんですよ。原則一回の審理で即日判決、弁護士も必要ありません。だから費用は総額でも一百万円前後かな。

村木

あんた誰だよ、弁護士でもないくせに偉そうに、

坂崎

いえ。今休職してますが、一応資格は。

麻衣

弁護士なの。

坂崎 (頷く)ただ、(村木に)あなたも殴られたんですよね。それについては暴行を受けたと訴える事も出来ます。

村木 あっ、そうだよね。頭何発も殴られたし、俺、恐怖で心ボロボロだし、慰謝料五、六十万貰ってもいいよね。

麻衣 何よそれ、

坂崎 いやそんなには請求出来ませんよ。見た感じキズも残っていないし、殴られた原因は貴方が約束を守らなかった事だとしたら、せいぜい十萬位かな。

村木 何だ、そうなの。

麻衣 はあ？

坂崎 病院で診断書出して貰って、医療費の実費と一日分の給与を休業補償として上乘せしたら、まあお仕事にもよりますが、トータルで十二、三万かな。

村木 慰謝料つてもっと貰えないの？

麻衣 馬鹿じゃ無いの、何で私があんたにお金払うのよ。

坂崎

もし双方の言い分をお金に換算したら、どちらも十二、三万位。丁度お互いの請求を相殺できるような額に落ち着くって事です。だから、この件はもうこれで終わりって事でいかがですか。

村木

(嬉しそうに) そうだね。しょうがない、それでいいよ。俺もちよつとは悪かったし。

坂崎

(麻衣に) じゃあ君の方も、

麻衣

ふざけないですよ。何適当に話まとめようとしてんのよ。こっちは実際に損害をこうむってるの。こんな商売してるからって嘘つかれて馬鹿にされて、黙ってられる訳ないでしょ。

翔太

ちよつと待てよ。

三平

翔太、

翔太

あんた、そんな偉そうな事が言えんのかよ。

一樹

翔太、いいよ。

翔太

良くねえよ。

麻衣

何あんた、誰？

翔太

憶えてもいないのかよ。

三平

翔太、どうした？

翔太

三平さん、この女ですよ、幼稚園の先生。

三平

え、

麻衣

幼稚園？…あ、

翔太

あんただって、俺達が「たかが板金工」だから適当にあしらったんだろ。

麻衣

そっか、あん時の…あのね、悪いけど今取り込み中。僕ちゃん達に付き合
ってる暇ないの。

翔太

ふざけんな。何が幼稚園の先生だよ。仕事もメアドも全部嘘。それで人に
は、嘘つく奴は許せないってか。

村木

あの…どうなってるの？

麻衣

あくめんどくさ。いいよ、相手してやるよ。でもこつちの話がついてからにしてくれる。見ての通り、今忙しいから。

翔太

それあんたの都合だろ。

麻衣

：あのね、私あん時もこんな恰好してたよね。こんな恰好のこんな喋り方の女が幼稚園の先生って、それ信じる方がおかしいと思わない？そつちが最初に医者だ弁護士だって嘘ついたからこつちも洒落でそう言っただけでしょ。まさか信じるなんて思っないわよ。

翔太

世の中にはそれを信じる馬鹿な男だっていんだよ。この一樹はな、

麻衣

いい加減にしてよ。あんた達あの時何か損した？実害あった？女の子とお酒飲めて楽しかったんでしょ。こつちは忙しい中、くそ面白くもないあんた達に付き合ってたのよ。

翔太

何だよその言い方は。この一樹はな、

一樹

翔太、

翔太

こいつは頭悪いし全然もてないけど、本気で彼女を作ろうって、あの合コンに真面目に参加してたんだ、そんな気持ち踏みにじりやがって。

麻衣

あくもう何これ。いい、こっちは生活掛ってんの。あんた達の青春の思い出作りに付き合ってる暇は無いの。あの合コンだって少しでもましな客を開拓しようと思っただけなのに、何板金工って。

翔太

…あんた、最低のビッチだな。

麻衣

ビッチで結構。分かったら邪魔しないで引っ込んでよ。

翔太

あんたのせいで、一樹は今宿無しだよ。それでも実害無かったって言えるのかよ。

麻衣

何言ってるの？

一樹

翔太、もういいって。

翔太

こいつはホント、ホント馬鹿だからあんたが言った事を真に受けて、家に帰って親父さんに頼んだんだよ。

麻衣

何の話？

翔太

あんた山売ってこいつに言ったじゃないか。だからこいつは親父さんに「親父が死んだらどうせ自分が受け取る事になる遺産、今の内に貰えないか」って言っちゃまったんだよ。

麻衣

はあ？

三平

一樹、本当か？

(小さく頷く一樹)

翔太

「好きな子が出来たから山売って金に換えたい、頼む」って、そう言ったとたんに親父さんは激怒だよ。

三平

馬鹿だね。

翔太

馬鹿だよ。馬鹿だけどき、こいつはそんな位本気であんたを好きになって、あんたが言った嘘を信じて、こころ中の幼稚園回ってあんたを探してたんじゃないか。

麻衣

…え。

三平

何か、馬鹿すぎてカッコいいんだか悪いんだか、

翔太 家も追い出されて、こいつ今は俺んところに居候だよ。これでも実害無かったって言えんのかよ。

麻衣 ……

一樹 翔太、ホントにもうやめろって。(麻衣にあの、気にしないでいいからね。こいつちよっと大げさに言ってるから。ていうか、こいつが言ってる程俺本気じゃなかったし。うん、

翔太 一樹、

一樹 こっちはホント何も問題ないんで、あの、どうぞ、そっち(村木)の問題に集中して頂いて、

村木 え、(こっちに振らないでよ)

麻衣 …… (俯く麻衣。静かになり、気まずい雰囲気)

亜矢子 佳純ちゃん、

佳純 はい。

亜矢子

お茶、貰える。

佳純

あ、ごめんなさい。(急須を取りに行き、亜矢子のお茶を足す)

亜矢子

何か、変な雰囲気になっちゃったわね。

佳純

うん。

村木

(麻衣に) …あの…俺、悪かったよ。十二万はちよつと無理なんだけど、せめて昨日の埋め合わせ位だったら、

麻衣

もういい。

村木

え？

麻衣

もう、いいから。

村木

本当に、いいの？

麻衣

(小さく頷いた後、一樹と翔太に) …合コンの件は、ごめん。私もいろいろ上手く行かない事があって、ちよつと焦ってたから。

顔を見合わず佳純と亜矢子。一同の表情が明るくなり、場の空気が和らぐ。

佳純 …（麻衣に）何か、食べます？

麻衣 え？

佳純 ていうかウチ、一応食堂だし。

麻衣 …ああ…でも、そろそろ行かなきゃ。

佳純 日替わり定食、たっただらすぐに出せるし、今日のはお勧め。

三平 旨いよ、ここの料理は。

亜矢子 美味しいわよ。

佳純 食べてって。

麻衣 …じゃあ…その日替わりを。

佳純 ちょっとお待ちください。

厨房に向かう佳純。厨房の中から盆に定食をのせた隆三が出て来てぶつかりそうになる。

佳純 何、父さん、びつくりするじゃない、

隆三 日替わりだ。

佳純 え、何で？

隆三 いいから出せ。

佳純 うん。

佳純が定食の盆を持って麻衣の席に。しばらく様子を見ているが、厨房に消える隆三。

佳純 お待たせ。

村井 早や、

佳純 茄子味噌炒めと鯖の塩焼き。小鉢のおカらは、特に自慢の一品。

亜矢子 このおカらはね、これがおカラ？って言う位しつとりしててホント別次元

でも佳純ちゃん、何でこんなに美味しいの？

佳純 高い材料は使えないけど、出汁だけはたっぷり、鰹も昆布もいいもの使って丁寧^二に仕込んでるから。

三平 この茄子味噌ね、ここの野菜はほとんどがそうなんだけど、ナスもこだわりの地元産。(佳純に)だよな。

佳純 うん。

三平 何つつても味噌が違うよ。これも確か自家製なんだよな。これが絶品で、

佳純 三平さんゴメン。味噌は自家製じゃなくて、知り合いの農家で作ってる田舎味噌。少しだけウチで白みそを合わせて、

三平 こまかい事はいいんだよ。とにかく旨いんだ。食ってみな。

村木 あの、俺も一言言わせて貰っていい？シンプルな焼き魚だってここを出してる物にハズレは無いよ。

佳純 父さん、魚にしてやれることはそんなに無い。魚料理は素材、鮮度が命だから仕入れは料理人の戦^二だつて。

麻衣 ……そうなんですか。

佳純 どうぞ。

箸を取る麻衣。皆の視線が麻衣に注がれる。翔太と一樹だけが少し離れて見ている。麻衣、顔を上げ、自分に注がれている視線に食べる事を一瞬ためらう。

佳純 あ、ごめんなさい。(三平や村木を咎め)ほら、

一同、麻衣から離れ、一旦そっとしておく素振りも、すぐに振り返って麻衣を見る。静かに食べ始める麻衣。

麻衣 ……これ…美味しい…美味しい。(箸を進めるが、やがてすすり泣き)

佳純 え？

三平 (小声で佳純に) どうしたの？

一同、驚いて互いに顔を見合わす。

佳純 あの、

麻衣 …ごめんなさい。

麻衣、立ち上がり、バッグから財布を取り出し千円札を一枚テーブルに置く。

佳純 え？

麻衣 ごめんなさい。(小走りで、下手の出口に向かう)

佳純 ちよつと待って。

一同、いなくなった麻衣の後ろ姿に困惑

三平 何だ？どうなってんだ？

翔太 一樹、

いきなり走って麻衣の後を追う一樹。転換明かり。

時間の経過があり、その日の夜。テーブルの上を片付ける佳純。厨房から登場し、少し離れ、椅子に座る隆二、片手で自分の肩をもむ仕草。

佳純 さっきはびっくりよ。父さん日替わり持って立ってんだもん。何？注文が

あるって分かってたのって思っちゃった。(笑)

隆三

…。

佳純

お兄ちゃんのお供え用だったとはね。自分で持って行くこととしてたのは、私にやらせるのが照れ臭かったからでしょう。

隆三

…たまたま手が空いたから、そうしようとしただけだ。

佳純

(笑)素直じゃないね。いつもは何でも私にやらせるくせに。

隆三

半人前のくせに役に立っているつもりでいるから、いつまでたっても成長しない。

佳純

ひどくい。だったら私に厨房やらせてよ。

隆三

何度言ったら分かる？女に包丁を持たせる訳にはいかないんだ。

佳純

だからそれいつの時代の話よ。

隆三

時代じゃない、ウチのしきたりだ。

佳純

こんな店が老舗の高級割烹みたいな事言ったら笑われちゃうから。

隆三 心意気まで店の間口に合わせてしまったらおしまいだ、それが爺ちゃんの口癖だった。

佳純 (小声で) 還暦とつくに過ぎてゐるのに親離れ出来ないって、恥ずかし過ぎでしょ。

隆三 何だつて？

佳純 何でもない。じゃあ、跡取りもないし、この店は結局父さんの代でおしまいということね。

隆三 お前が婿でも取れたら別だがな。

佳純 おあいにく様。そんなハードル上げなくても嫁に貰ってくれる人も現れそうにないんだから。

隆三 情けない奴だ。

佳純 でも父さん、定食のお供えをしたって事は、もうお兄ちゃんを赦したって事よね。

隆三

赦すとか赦さないとか、そういう事じゃない。しきたり通りにしただけだ。

佳純

しきたり？命日にその日の日替わり定食を仏壇に供えて欲しいっていうのは、お爺ちゃんの遺言でしょ？

隆三

爺ちゃんの遺言は、この家のしきたりだ。

佳純

じゃあ私が死んでもそうするの。

隆三

お前も親より先に死ぬつもりか。だったらそうしてやる。

佳純

可愛くない。

隆三

…。

佳純

ね、そろそろお兄ちゃん納骨してあげてもいいんじゃない？

隆三

…。

佳純

だってせつかくウチのお墓があるんだもん。お兄ちゃんだって、毎日不機嫌そうなお父さんの顔を見てるより、お母さんやお爺ちゃんと一緒の方が嬉しいと思うよ。

隆三

…。

佳純

お兄ちゃん死んじゃったのよ。亡くなった人をいつまでも責めてどうするの？

隆三

別に責めちゃいない。あいつはああいう子だった、そう思ってるだけだ。

佳純

それって責めてるって事じゃない。

隆三

違う。

佳純

じゃあ何なの？お父さんが何考えてんのか分かんないと、私も娘としてどうしたらいいのか分かんない。

隆三

お前に何かして欲しいなんて言ってないし、父さんが何を考えてるかなんて、お前が知る必要も無い。

佳純

何それ、ホント酷い事言うよね。私ぐれちゃうからね。

隆三

ぐれる歳か。

佳純 全く。あくつくづく悔しいな。私もお兄ちゃんみたいにもっと親に心配させたら良かった。

隆三 娘なのにその器量だ、生まれた時からずっと心配させられてる。

佳純 あのですね、言っときますけど、顔は父さんに似てるって言われてるんです。少しは責任感じて頂けます？

隆三 (立ち上がり)明日も早い、もう寝るぞ。

厨房に向かう隆三。

佳純 何、逃げるの？ちよつと、父さん、

隆三を見送った後、しんみりとする佳純。

佳純 (独自)：お兄ちゃん、ずるいよ。親に心配させるだけ心配させて、あつと
いう間に死んじゃって…なのに父さんの頭の中は、今もお兄ちゃんの事ば
っかり…。

— 暗転 —

暗い中に三平の下手な歌が聞こえる。

三平（歌）

行儀良く真面目なんてできやしなかった、夜の校舎窓ガラス壊して回つた、

明るくなり、翌朝の底ん処。舞台中央の三平、厨房の中の佳純に向かって話している。

三平

って、歌詞のまんまだもん。二中の一階の窓ガラスで割れずに残ってたの
は一枚も無かったつうから、まく輝の奴、派手にやったもんだよ。だけど
さ、お前のせいだつて親父さんに怒鳴られた俺としては、えっ何で何で？
って感じよ。

佳純

（前掛けの紐を結びながら、厨房より登場）まあ確かに、三平さんここで
お兄ちゃんが尾崎豊を聴いてたつていうのは関係無い話だとは思うけど、
それまでのお兄ちゃんが真面目すぎる位真面目だったから、父さんも何が
何だか分からなかったのよ。

三平

確かにガキの頃俺の後にくつついて遊んでた輝は、泣き虫だったけど素直
な子だった。

佳純

父さんは、むしろ私の方を心配してた位だし。

三平 お前はさ、見てくれも性格もまるつきり男だったもんな。今も大して変わってないが。

佳純 うるさい。

三平 親父さん、男手一つで良く頑張ったとは思うけど、何とも不器用な性格だからな。

佳純 お兄ちゃんが問題起こす度に父さん大声で怒鳴って、話も聞かずに殴って、それに反発したお兄ちゃんがまた問題を起こして、毎日その繰り返しだった。正直、お兄ちゃんが家出した時にはホッとしたもん。

三平 俺は感心してたんだよ。家の中があんだけ荒れてるのに、お前はよくまともでいられたなって。

佳純 女は男と違ってどんな時でもちゃんと人生の損得勘定がち出来るのよ。

三平 あゝそれは間違いない。

佳純 だけど…やっぱし父さんはお兄ちゃんの事をずっと引きずってるみたいだし、多分そのせいだと思うけど、お兄ちゃんのお骨をお墓に入れようとしてないんだよね。

三平　　そっか。だけどそこは、亡くなっちゃったらみんな仏様だよって、親父さんにそう言っただけで聞かせるしかないんじゃないの。

佳純　　それは何度も言ったの。だけどその度に「そんな事は分かっている」って生返事。

三平　　親父さん、何に拘ってるのかな。やっぱしあれか、輝の最期があんなだったから…。

佳純　　私にも分かんないの、父さんが何を考えているのか。

三平　　良い方に考えたらいいんだけどな。少なくとも輝はもう死んじゃまって、この先悪さをする事も出来ないんだから。(笑)

佳純　　…。

三平　　あ、わりい。俺ちよつと遠慮無しに言い過ぎたか？佳純がすっかりしてるから、つい。

佳純　　私は平気。

下手より、坂崎登場。

坂崎 あの…ごめんください。

佳純 いらつしやいませ、あ、

三平 あれ、あんた昨日の、

坂崎 あつ…はい、

三平 確か、弁護士の先生？

坂崎 …ええ。

佳純 今日もいらして頂いたんですね、ありがとうございます。ただ、まだ営業時間じゃないんですよ。

坂崎 …ですよね。

三平 あ、俺はね、ここの家族みたいな者だから。

佳純 （坂崎の何か言いたげな様子に気付き）あの、何か？

坂崎 あいえ、昨日食べた大根とゴボウのきんぴらがあんまり美味しかったから、

三平 それでわざわざ、こんな早くから？

坂崎 あの、ご主人は？

佳純 父は、仕入れに。もうすぐ戻ると思いますがけど。

坂崎 こちらの娘さんですか？

佳純 ええ。

坂崎 そうですか。

三平 あの、俺おたくにちよつと聞きたいことがあんだけど。

坂崎 はい？

三平 おたく、弁護士さんだったら、警察に捕まった人間とか、その家族とか、
いっぱい見て来てるよね。

坂崎

え？

佳純

三平さん、何言ってるの、

三平

(佳純に) いいから。(坂崎に) 中には事件そのものは片が付いた後も、罪を犯した身内を、受け入れられない家族もいたりするよね。

坂崎

はい。

佳純

三平さん、

三平

(坂崎に背を向け、小声で) 佳純、こういう事はやっぱり専門家の意見を聞くのが一番だと思うよ。

佳純

だからってお客さんにいきなり、

三平

昨日、お前も見тар。この人はさ、あん時ムラとあのキャバ嬢の喧嘩を収めようとしてあんな事言っただよ。金にもならないのにクビ突っ込んで、根っからの弁護士さんなんだよ。

佳純

だからって、

坂崎

あの、

三平

あくわりいわりい。これね、特定のどつかの家族とかの話じゃなくて、あくまで一般論なんだけど、

坂崎

はい。

佳純

(小声) 何が一般論よ。

三平

例えば、男手一つで育てた息子が、ぐれて道をそれてしまったとするわな。

坂崎

…はい。

佳純

まんまじゃない。

三平

ちよつと重い話だし、法律の相談とかでもないんだけどね。

坂崎

ええ。

三平

でそのぐれた息子が傷害事件を犯して服役する。刑期は多分三年位かな。父親は曲がった事が大嫌いな人間だから息子が許せない。当然面会とかも自分が行かないだけじゃ無く、家族が行く事も許さないんだよ。その内

に服役中の息子が病気になって病院に移されたって知らせが届くんだが、意固地な親父はやっぱ息子に会いに行こうとはしない。そして娘にも

佳純

ちよっと、

三平

あいや、家族にも絶対に行っちゃならないと言う訳よ。

坂崎

はい。

三平

息子は三十代、まだまだ若かったし、親父さんも家族も息子の入院をそれほど深刻には考えていなかったんだ。ところが、暫くして、いきなり訃報が届くんだよ。つまり、息子が病気で亡くなったって。

坂崎

…そうですね。

三平

まあこれが粗方の話。でその、何だよ、当然、何をどうしたって死んだ息子は戻ってこないし、残された家族は元気に生きて行くしか無い訳だけど、この親父さんがいつまでも息子の事を引きずってるようで、元気もない。そんな場合、この心のケアというか、何かアドバイスをするとしたら…。

坂崎

アドバイスですか。

三平 うん。まずね、この親父が何考えてんのか分かんねえんだよ。息子の命日に定食の供え物はするが、骨はいつまでも墓に納めないとか。

坂崎 定食？

三平 あ、それは何でもない。

佳純 まったく。

三平 とにかく、似たようなケースで今はみんな元気にやってるよ、みたいな話どっかで見たり聞いたりした事ないかな。

坂崎 …すみません、そういう話は…。

三平 無い？

坂崎 ええ。

三平 何だ、無いのかよ。

佳純 三平さん、失礼よ。

三平　だつてさ、先週観たドラマに出てた弁護士なんて、貧しさ故に罪を犯した親子を助けて、何年も心の支えになつてやつてさ。

坂崎　あの、実際の弁護士は法律に書かれた文言に縛られた窮屈な仕事です。抱える件数が多くなると人情とか心の機微とかつていうのは、一番最初に無視する事が求められます。

三平　寂しい話だね。

佳純　もう、三平さんったら。

下手より、以知子登場。

以知子　やっぱりここだ。

三平　あ、

以知子　あんた朝っぱらからフラツと出たつきり、こんな所で何やってんのよ。

三平　いや俺は、いつもお客さん用に買つてる雑誌が今日発売日だからさ、少しでも早くと思つてコンビニに行ったんじゃないの。そしたらまだ来てないつづうからさ。

以知子
（レジ袋に入った週刊誌）これ何？

三平
あれ、もう来てた？

以知子
朝刊と同じ時間に届いたってさ。

三平
そうなの？俺聞いたら無いっつうから。そっか、バイトの店員はいい加減だな。

以知子
あのね、いくら髪結いの亭主ってご身分でも、開店前に店の表を掃き掃除位しても罰は当たらないのよ。

三平
勿論だよ。

佳純
以知子さん、ごめんなさい。私もちよつと相談にのって貰ったりして、三平さんを引き止めちゃったから。

以知子
あく佳純ちゃんのせいじゃないのは分かってんのよ。でもさ、昼も夜もここでご飯食べてんのに、まだ足んないのかね、この人は。

三平
俺、先に帰って、店の前ピッカピカに磨き上げとくからよ。

以知子

ちよつとあんた。

三平

お前は、ゆつくりしてくればいいよ。

以知子

何言つてんの、ちよつと待ちなさいよ。

三平

じゃあ佳純、また後でな。(下手に退場)

以知子

まったく。バツが悪いもんだから、逃げちゃったよ。

佳純

ごめんなさい。

以知子

だからいいって。ここのお陰で私も助かってるんだから、ホントよ。

佳純

そう言つて貰えると。

以知子

あんなんでも一応亭主だからさ、ご飯食べさせない訳にもいかないでしょ。だけど私は店が忙しくてそんな暇ないし、あの人が自分で料理したら一番いいんだけど、とにかく一人じゃ何にも出来ない人だから。

佳純

三平さん、昔から面倒見が良くてみんなに慕われてるのに。

以知子

私もね、そんな外面に欺されちゃったのよ。

佳純

もう。(笑)

坂崎

あの、

佳純

あ、はい、

坂崎

私、また後で…。

佳純

あ、済みません。父、もう戻りますけど。

坂崎

いや、出直しますよ。

佳純

そうですか。

坂崎

あの、ご主人と少しお話し出来る時間、お店が比較的暇になる時間帯は？

佳純

…大体、三時過ぎから四時頃です。

坂崎

じゃあ、その頃に。

佳純

あの、父に何か？

坂崎

：そうですね。あの、私、坂崎といいます。訳あって弁護士は休職中なんです。それで暇してたら、出版社に務めてる友人が雑誌の記事を書かないかって、紀行文とか、食べ歩きの話とか頼まれました、まあライターの実事感を感じて。

佳純

じゃあ、それで、

坂崎

はい。昨日のきんぴら、茄子の葱味噌はさみ揚げ、焼き魚、どれも絶品で、

佳純

ありがとうございます。

坂崎

料理だけじゃなくて、お店の雰囲気もとてもいいので、ご主人にお話を聞いたら何か書けるんじゃないかと思ひまして。

以知子

ちよつと佳純ちゃん、いい話じゃない。お店の宣伝になるわよ。

佳純

うん。

坂崎

あの、すみません。本職のライターじゃないので、実は、書き上げても実

際に記事になるという保証はないんです。いや、むしろボツになる可能性の方が高いかも知れません。

以知子

でも、もしかしたら雑誌に載るんですよ。いいじゃない。ねえ佳純ちゃん。

佳純

うん。(坂崎に父に伝えておきます。

坂崎

そうですか。じゃあ、よろしくお願いします。

以知子

ここホントにいい店だから、是非、いい記事書いてあげて。

坂崎

あ、はい。じゃあ、また後ほど。

佳純

よろしくお願いします。

会釈をして下手に退場する坂崎。坂崎の後ろ姿を興味深げに見送る以知子。

以知子

ねえ佳純ちゃん、あの人何、本職は弁護士なの？

佳純

そんな話よね。

以知子

ちよつと、感じのいい人じゃない。

佳純

そうね。

以知子

そうねじゃなくて、佳純ちゃんあんた、頑張ってみたら？

佳純

はあ？

以知子

はあつて、まともな男との出会いなんて皆無に等しいこの環境に、突然現れた王子様かもよ。

佳純

以知子さん、もう何言ってるの。

以知子

佳純ちゃん、あんたこういう事にうと過ぎなんだから。分かってる？恋愛とか結婚とかちゃんと考えなかつたら、この先お父さんの面倒見るだけの人生で終わっちゃうわよ。

佳純

はいはい。そんな事より、私やつぱり、父さんの事が心配になってきた。

以知子

佳純ちゃん、

佳純

父さん、取材とかちゃんと受けられるかな。